

七九ある僧人の許にて氷魚（ひを）盗み食ひたる事 宇治拾遺物語卷五・十

これも今は昔、ある僧人のもとへ行きけり。主語は？酒などすすめけるに、氷魚はじめて出て

来たりければ、あるじカ珍しく思ひて、もてなしけり。四段もてなす連用あるじ用の事ありて、内へ入り

て、また出でたりけるに、この氷魚の、殊の外に少なくなりたりければ、あるじ、

いかにと思へども、いふべきやうもなかりければ、物語し居たりける程に、この僧の

鼻より、氷魚の一つ、ふと出でたりければ、あるじあやしう覚えて、「その鼻より氷魚

の出でたるは、いかなる事にカといひければ、取りもあへず、「この比の氷魚

は、目鼻より降り候なるぞ」といひたりければ、人皆、はと笑ひけり。

「鮎の稚魚

1. ここは、主語がないとわかりにくいので、書いてある。常識でわかるところは省略。
2. 「怪し・奇し・異し」で異様なものを不審に思う感じが原義
3. 氷が降る雹（ひょう）ということばは氷が語源。鎌倉時代にはあったようだ。
- 4.